

第5章 現在の和歌山と将来



天神崎の自然と保全活動～ナショナル・トラスト運動～



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

田辺湾の自然

紀伊半島の沖を流れる黒潮はその一部は潮岬から田辺の方に流れています。そのため、暖かい海の生物が和歌山県の海岸にも住み着き、田辺湾周辺の生物相は豊かです。

田辺湾には神島と島島があり、神島は昔ながらの森が茂る島として南方熊楠が大変大事にし、熊楠がこの島で昭和天皇を迎えて話をしたり、神島を国の天然記念物としたことはよく知られています。また、島島は、干潟があって京都大学臨海実験所の実習地として保護されています。

この田辺湾の入口の北側に天神崎という小さな岬があります。この岬の丘陵地は森で、その周辺には大変広くて平らな磯があります。景色もよく、自然が豊かなところで、古くから人々に親しまれ、田辺南部海岸県立自然公園の一部となっています。この海岸の森や、森に囲まれた湿地(水田の跡)、そして、磯にはいろいろな生物が住んでいます。特に磯では、暖かい海の生物が多く、子どもたちが自然に親しみながら遊べる安全な場所となっています。



天神崎の空撮(写真提供:田辺市役所)

天神崎の保全運動のおこり

1974年(昭和49年)、この海岸の森の一部に別荘が建設される計画が明らかになりました。別荘ができると森が少なくなり、森の生物だけでなく磯の生物にも影響が及ぶこととなります。当時、田辺商業高等学校(現在は、神島高等学校)にいた外山八郎先生がこの計画を知り、田辺市民に呼びかけて「天神崎の自然を大切にする会」をつくりました。そして、天神崎の森を残すことを願う市民の署名(16,000名)を集めて、田辺市長や和歌山県知事に要望活動を行いました。

しかし、県立自然公園であっても、県は別荘を作ることを止めることができないとの判断でした。メンバーは相談して、この自然を残すために、募金活動をしてこの土地を買い取ろうということになり、市民地主運動がはじまりました。はじめは、田辺市民や全国にいる田辺出身の方々に募金を呼びかけました。

土地の買い取り……ナショナル・トラスト運動

こういう運動は、イギリスでは既に100年も前からすすめられていて、ナショナル・トラストという運動と呼ばれていました。人々が寄付金を出して、そのお金で自然や歴史のある建物などを買い、いつまで

* 1 第2編 第4章「南方熊楠と紀南地方」169ページ参照。

もみんなのものとして大事にしていこうというものです。天神崎の運動は、イギリスのナショナル・トラスト運動と同じことでした。この運動を成功させるために、大阪や東京など各地で募金活動を広めました。自然を残すために資金を集めて土地を買い取る運動はそこ日本では珍しかったので、新聞やテレビで取りあげられ、関心をもった人たちが音楽会などを催して募金活動を行ない、報道で知った人びとからも温かい寄付金が続々と送られてきました。全国の100校をこえる小学校からは、激励の手紙・寄せ書き・寄付金までもが届きました。

全国の人々からの支援金と、借金などで、別荘予定地は買い上げることができました。その後に和歌山県と田辺市もこの活動に協力して保全のために土地を買い取りました。

こうして、別荘予定地は保全地となり、さらに、天神崎の丘陵地の自然全体の保全を目指して募金活動を続け、買取り地（保全地）はだんだんと広がっています。



湿地（この周辺の山に別荘ができる予定だった）



潮だまり（タイドプール）で生きものを観察する子どもたち

自然を大切に

運動の初めの頃は大変な困難が続き、この自然を残すことは無理だとさえ言われました。募金などで本当に買い取ることができるのか、という大きな不安がありました。しかし、それ以外にこの自然を残す方法がないとの結論になったのです。その時、運動は「未来の子どもたちのために」このかけがえない自然を残そうということになったのです。

今、天神崎には多くの子どもたちや、各地から人々がよく訪れ、森、湿地、磯の生物に触れながら、自然や生命について学んでいます。生き物を見つけて喜んだり、驚いたり、興味深く観察しています。そうした学習を通じて、自然のしくみや、自然や生命の大切さを深く知る機会になっています。